「な、何ですってぇーっ!!?」

２５年ぶりに開催されるエンドール国王杯武術大会に際し、王が約束したこと‥‥それは、「優勝者への報酬として、王女モニカとの結婚を許す」という、驚くべきものだった！
しかし、それを後悔した王は、アリーナに‥‥

「そなたにも、武術大会に出場してほしい。そして、そなた自身の力で、優勝を
勝ち取ってほしいのだよ」

王家の身勝手とも言えるほど、あまりにも、アリーナに不利な依頼。
しかし、「誰とも知らぬ男の元へ嫁ぐのは嫌だ」というモニカの真意を汲んだアリーナは、彼女に優しく言うのであった。

「私が助けてあげる」

＊

この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ４二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」第２章より～

第２話　「パジャマ・トーク」

あさづけ兄貴

「とにかくですな」
その部屋に二つあるベッドの、そのひとつに腰かけたブライの声が、石壁の寝室に低く響く。

他国の王族や高僧など、重要な訪問者のあった時にのみ使われる、貴賓寝室。
アリーナたち３人は、王室を辞した後、アリーナが泊まることになっているこの部屋で、明日以降の大会のための話し合い‥‥いわば、「作戦会議」のようなものを開いていた。

「引き受けてしまったものは仕方がない。じゃが、引き受けてしまった以上‥‥そして、それが『優勝して欲しい』という依頼である以上、姫様は必ず優勝せねばなりませぬ」
「分かってるわよ、そんなこと」
苦虫を十匹ぐらいまとめて噛みつぶしたような顔のブライに、もう片方のベッドの上であぐらをかいていたアリーナも、少し不機嫌そうな顔で答える。

アリーナは、王室からこの部屋に戻って来てすぐ、グレーの長袖のゆったりとした服と、それとお揃いの無地のズボン、というラフな格好に着替えていた。
汗を吸いやすい、少し厚手のタオル地で出来た服である。寝るにも、体を動かすにも最適であると、アリーナはたいそう気に入っていた。
このような服は、一般に「汗取り服（スウェットスーツ）」と呼ばれ、市民の部屋着として、また運動服として、広く親しまれているものである。
とはいえ、それはあくまで一般市民の話。王族のような身分の高い者でこのような格好を好む者は、恐らく、アリーナの他にいないであろう。

ブライとクリフトは、自分たちが泊まっている別室に帰らずに、王室からそのままこの貴賓寝室に直参したため、先ほどの格好のままである。

＊

「私が優勝しなきゃ、モニカ姫が訳の分からない男の物になっちゃうでしょ。それはイヤだもん」
「まるで、自分の事のような口ぶりですね」
口をとがらせるアリーナに、くすっ、と、ブライの隣に腰かけたクリフトが笑う。他人の事にこれだけムキになる彼女を、微笑ましく思ったらしい。

「自分の事‥‥まぁ、確かにね‥‥」

アリーナは、なぜか、遠い目をしつつ、ごろん、とベッドに横になった。

「？」
言葉の真意を計りかねるクリフト。一方、隣のブライは‥‥

「なるほど、そういうことでしたか‥‥納得が行きましたわい」
膝を、ぽん、と打つ。

「？？」
「納得って‥‥なにが？」

ますます分からない、といった顔をするクリフト。アリーナも、起き上がり、身を乗り出して訊ねる。

「姫様が、先ほど、あれ程お怒りになった理由ですじゃ。本当に他人事ではなかった、
　ということなのですな」
「ま、そういうことね‥‥っていうか、それぐらい一瞬で分かってよね」

また、少し不機嫌そうな顔をするアリーナ。

「？？？」
クリフトの頭の中には、ますます「？」が増えてゆく。

「‥‥って、そっか、クリフトは知らないんだっけ。ごめんねクリフト、私たちの
　言ってること、分からないでしょ」
不機嫌そうな顔をやめ、アリーナはクリフトに向き直って言った。

「も、申し訳ありません」
「いいのいいの、貴方が謝るような事じゃないわ」
アリーナが微笑む。
「クリフト、この件については、儂(わし)があとで教えてやる」
「は、はぁ‥‥」

結局、この時はまだ、クリフトの頭の中の「？」は、消えなかったのであった。
だが、一方、ブライの先刻からの謎は、解けたようである。

＊

「さて、話が逸れましたな」
ブライが続ける。
「とにかく、姫様は勝たねばなりませぬ。そのために、儂とクリフトに何が出来るか

‥‥」

その時である。
トン、トン‥‥
短く２回、部屋のドアをノックする音がした。

「は〜い」
「あいや、儂が」

返事をし、そのまま扉に近づこうとしたアリーナを制し、ブライが扉の方へ歩いていった。
寝室とはいえ貴賓室、ベッド２つに机、洗面台やトイレまで付いている。ベッドから入り口までは、やや距離があった。

扉の前で、ブライはそのまま、扉越しに答える。
「何用ですかな」
「国王陛下から、アリーナ姫様に今回の大会の出場者名簿を届けるように、と
仰せつかっております」
女性の声であった。

「うむ」
ブライが扉を開ける。
扉の前には、長身の女性が立っていた。
耳のやや下できれいに切り揃えられた、おかっぱの黒髪に、白いカチューシャが映える。
濃紺のワンピースに白いフリルの付いたエプロン。
典型的な、侍女の出で立ちであった。

「こちらを」
事務的な手つきで、侍女はブライに、一通の封筒を差し出した。
「確かに。ご苦労でしたな」
封筒を受け取ったブライのねぎらいの言葉に、侍女はほんの少し微笑み、
「それでは、失礼いたします」
うやうやしく頭を下げて、そのまま静かに扉を閉じた。

「姫様、名簿が届きましたぞ」
アリーナの許に戻って来たブライが、手に持った白い封筒を眼前にかざす。

「本当？　見せて見せて！」
「これで、出場者に対する対策が立てられますね！」
　アリーナが、我先に手を差し出す。クリフトも、ようやく話し合いに進展の可能性が出てきたからであろうか、ずいぶん嬉しそうな口調であった。
「では、姫様」

　ブライが差し出した封筒を受け取ると、アリーナはその口を、びりっ！　と無造作に破いた。
　中から、折り畳まれた１枚の紙を取り出し、ベッドの上に広げる。

「どれどれ‥‥？」

　好奇心の塊、といった目つきで、アリーナが紙を覗き込む。ブライとクリフトの視線も、この紙に集まっていた。

「出場者‥‥全３２名‥‥」
　クリフトが、一人一人の名前を読み上げてゆく。

「‥‥と。これで全員ですね。‥‥姫様の名前がありませんが」
「当たり前じゃバカ者。姫様の出場は先ほど決まったばかりであろうが」
「そ、そういえば‥‥そうでしたね」
　ブライにぎろりと睨まれ、ばつの悪そうな顔をするクリフトであったが‥‥ふと、何かに気がついたような表情で、言った。
「でも‥‥それならば、変です。この名簿」

「え？」
「何じゃと？」
　思わずクリフトの顔を覗き込むアリーナとブライ。
「何か、変なところがあるの？」
「ええ‥‥」
　クリフトは、やや表情を曇らせ‥‥話を続けた。
「姫様、ブライ様、この名簿、真新しいインクの匂いがしませんか？　まるで、たった今書いたような」

「あ‥‥」
「そういえば確かに‥‥おぬしの言う通りじゃ」

「でしょう？」
クリフトは、真剣な面持ちで、さらに続ける。
「おかしいとは思いませんか？　今しがた書いたものならば、姫様の名が抜けている
　のは不自然だと思うのですが‥‥」
「王の、あるいはこの名簿を書いた者の、単純なミスではないのか？」
「ええ、私も、その可能性が高いと思うのですが‥‥」
不安げに、クリフトが言う。

（やるもんじゃのう、クリフトも）
口を出さずに、ブライは思った。
（姫様も儂も気がつかなんだインクの匂いに気付いた注意力‥‥さすがに、神官学校で
　「天才」と呼ばれただけのことはあるというわけか）
目を細める。
（まぁ、さっきはどうなる事かと思ったがの‥‥。あとは、修羅場に対応する経験
　じゃな）

＊

その傍らで、アリーナは、食い入るように名簿を見つめていたが‥‥やがて、くすっ、とわずかな苦笑を浮かべた。
「‥‥これ、たぶん私」
そう言って、名簿の一番下を指差す。

「？」
「え？」
アリーナが指差した、その名簿の一番下の行には、

名前：？
流派：？
解説：　３３人目の出場者。特別招待選手。その正体は秘密

という記述があった。

「特別‥‥招待選手‥‥」
「その正体は秘密‥‥じゃと‥‥？」
あっけにとられるブライとクリフト。

「どうやら、私の正体を伏せるつもりらしいわね。あの王様」
アリーナが、溜め息混じりに言う。
「まったく、何考えてるのかなぁ‥‥秘密にしたって、いい事なんか何も無いのに」

「そうとも限りませんぞ、姫様」
「え？」
アリーナの困り切った表情が、ブライの指摘で、やや驚きの混ざったそれに変わる。

「正体を明かさぬ選手がいるとなれば、他の選手、そして観客の注目が、そちらに
集まることは自明の理‥‥」
ブライの説明に、クリフトが口をはさむ。
「そして、それが姫様‥‥１７歳の女の子で、しかも王女で、しかも、ものすごく
強い、となれば‥‥」
「そうじゃクリフト。ますます姫様への注目は集まり‥‥ひいては、この大会自体への
注目もまた、集まることとなる」
「つまり‥‥」
アリーナが、また不機嫌な表情に戻り、言った。
「私を客寄せに使ってる、って事？」
「客寄せ、というか‥‥まぁ、端的に言えば、そういうことになりますかな」
「はぁ‥‥」
アリーナは、先ほど王室でしたのと同じように、溜め息をつきつつ、右手で顔面を覆った。
「なんだか、泣きたくなってきたわ‥‥まったく」

「まさに、食わせ物ですな。あのエンドール王は」
先ほどよりさらに多量の苦虫を噛みつぶしたような表情で、ブライが言う。
「どこまで、姫様を利用すれば気が済むのじゃ」

沈鬱な静寂。

「で、でも姫様！」

その静寂を破ったのは、クリフトであった。

「姫様が実際に優勝すれば、姫様自身、世界にその名を認めさせる事ができるじゃ

　ありませんか！」
傍から見ていても、努めて明るく振る舞おうとしているのが分かる。
「逆に、目立って目立って、他の選手の注意を引き付けるだけ引き付けて、その上
　全員倒してしまえばいいんです！」

とにかく、アリーナを喜ばせたい一心で‥‥しどろもどろながらも、クリフトは言った。

「そうね‥‥そうよね。勝つか負けるかは、また別問題よね。勝てばいいんだから」
クリフトの、その必死の想いが通じたのか、アリーナの顔に、微笑みが戻った。
「よっ‥‥と」
ベッドから飛び降り、クリフトの目の前に、たたたっ、と駆け寄る。
そのまま、クリフトの瞳を見据え、その両手を、ぎゅっ、と握った。

「ありがと、クリフト。おかげで元気出た」

「えっ‥‥！」
クリフトの顔が、一瞬で、真っ赤に染まった。
「え、いえ、あの、私はその、姫様に仕える者として、あの、当然のことを‥‥」
真っ赤な顔で、何やらよくわからない事を呟き続けるクリフトを見て、アリーナは再び、くすっ、と微笑んだ。
「変なの‥‥何赤くなってんのよ」

＊

言うまでもないが、アリーナは、かねてより国民にも人気のある、魅力的な王女である。
ただ、このクリフトがアリーナに感じる「魅力」は、もしかしたら、他の人が彼女に感じる「魅力」とは、異なるものであったかも知れなかった。

クリフトにとって、彼女の最大の魅力は、その「飾らなさ」であった。
愛くるしい容姿の１７歳の王女。
その血筋にふさわしい教養、そして品位を、確かに彼女は備えていた。
しかし彼女は、それでいて、決して気位が高いわけではなく、こうして、部屋着のまま、クリフトの手を握ったりする‥‥そんな少女なのである。

神官という職業柄か、はたまた、神官学校でひたすら勉学と信仰生活に打ち込んでいた

からか‥‥女性にほとんど免疫のないクリフトにとって、彼女の自然さ、飾らなさは、非常に好ましいものだったのだ。

　そんなわけで、アリーナのことを憎からず思っているクリフトの、その想いは‥‥しかし、彼女にはなかなか届きそうになかった。
　そういう人心の機敏を感じるには、彼女は致命的に鈍かったのである。

　何も考えず、クリフトの手を握るアリーナ。それに赤面してしどろもどろになるクリフト。
　そんな関係が、まだ、しばらく続きそうであった‥‥。

＊

　クリフトは、思わず、アリーナに握られた両手を引っ込めた。
　「あ、いや、その‥‥ははは‥‥」
　照れ笑いを浮かべながら、ぽりぽりと、頭をかく。
　もちろん、室内では、彼のトレードマークの帽子はかぶっていない。

　「本当に変なの」
　アリーナが苦笑する。

＊

　「さて、姫様」
　いつの間に移動したのだろう、部屋の隅にある机の前から、ブライが歩み寄ってきた。
　「もう結構な時間ですじゃ。明日に響くと良くない、そろそろお休みになられませ」
　「あ、そっか‥‥そうよね」
　「名簿は書き写しました。儂らはこちらを持って行きます故、原本は姫様がお持ちに
　　なって、大会の対策にお役立て下され」
　「うん。ありがと」

　「では‥‥行くぞ、クリフト」
　「あ、はい！」
　クリフトが慌てて立ち上がる。

　「では姫様、おやすみなさい」

「明日は早くから組み合わせ抽選がありますからな。寝坊は厳禁ですぞ」
「分かってますよーだ。べー」
茶目っ気たっぷりに、舌を出してみせるアリーナ。

「では、失礼」

戸口で再度礼をして、ブライとクリフトは、部屋から出ていった。

＊

「ふぅ‥‥」
再びベッドに腰かけ、一息つくアリーナ。

天井を見上げる。
見えるのは、もちろん、この城の壁や床、天井を構成する切り石の、規則正しい配列、くすんだ色彩だけである。

だが‥‥
アリーナは、その向こうに、別のものを見ていた。

闘技場(コロシアム)を埋める観客。
青い空の下、足元に広がるのは白い砂。
肌を灼(や)く日差しの中、陽炎(かげろう)に揺らぐ、倒すべき敵の姿。
大歓声が響く‥‥。

翌日、アリーナの眼前で繰り広げられるであろう、そんな光景が‥‥彼女の脳裏には、既に広がっていた。

「明日‥‥か‥‥」
誰に言うとでもなく、呟く。

しばらくそのままの姿勢で、放心したように天井を見上げていたアリーナだったが‥‥
「よし！」
元気よく叫ぶと、やおら立ち上がった。

部屋のまん中に、立つ。

両足を、肩幅に開く。
両拳を握り、腰の高さに持ってくる。
胸を張る。

そのまま、目を閉じた。

すうっ‥‥
お腹を膨らませるように、ゆっくりと、息を吸い込む。

ふうっ‥‥
それをまた、ゆっくりと、吐き出す。

すうっ‥‥
ふうぅ‥‥
目を閉じたまま、繰り返す。

呼吸を整え、精神を統一する。
かつて、彼女の「師」と呼べる人物に教わってから、アリーナが欠かさず実践している呼吸法である。

その呼吸を何度か繰り返したあと、

すううううっ‥‥
ふううううっ‥‥

思い切り大きな呼吸をすると、アリーナは、かっ、と目を見開いた！

「ハッ！」
ビシュッ！
アリーナの右正拳が、空を裂いた。

「ヤッ！」
シュッ、シュバッ！
今度は、左右の拳で、目にも止まらぬ突きを３発。
凄まじいコンビネーション！

「ふうっ‥‥」
再び目を閉じ、息を吐く。
「すぅ‥‥っ！」
息を吸うと、また、目を見開いた！

「ヤァッ！」
シュオッ！
アリーナの左脚が跳ね上がり、斜め上、彼女の右前方に、直線的に伸びる！
もし、そこに敵の頭部があれば、あるいは一撃で破壊されていたであろう‥‥そんな破壊力を秘めた、恐るべき蹴りであった。

「セヤァ！」
ジャッ、シュバッ！
右足の回し蹴りから、その跳ね上げた右足を新たな軸足として、左の後ろ回し蹴り！

「ハアッ！」
左の回し蹴り‥‥だが、今度は、その蹴りが、最高点まで上がった後、急峻なカーブを描き、目の前に振り下ろされる！
頭と見せかけて、下段‥‥相手の脛(すね)を狙う、高等テクニックである。

これだけ多彩な蹴りを見せながら、アリーナの軸足は、ぶれ一つ起こしていない。
それでいて、蹴り足はあくまでも力強く。
彼女の足腰の強靭さとバランスの良さが見て取れる。

「ふぅ‥‥」
再び、目を閉じ、直立。

静から動へ、動からまた静へ。
小気味良く移ろい行く、アリーナの動き。

呼吸が、全く乱れていない。
それは、取りも直さず、アリーナの心肺機能の高さを証明していた。

「‥‥っ！」

再び目を開くと、今度は小走りに、壁際へ。

壁を自分のすぐ右に置くように、横向きに立つ。

「ハッ！」
軽く左にサイドステップした後、彼女は、進む方向に、大きく体を傾けた！
完全に逆さまになった体を、左腕一本で支える！
そのまま、左腕の力で軽くジャンプ。横に進む勢いと腕の力で、彼女の体はさらに回転し、見事に着地した。

左腕一本での側転‥‥そんな芸当をも、やすやすとやってのけるバランス感覚と腕力。
それをアリーナは、備えているのだ。

「ヤッ！」
アリーナは、今度は、全く逆方向‥‥右方向にサイドステップする。
そのまま、右方向に側転。もちろん、体重を支えるのは右腕だけだ。

スタッ！
危なげなく、再び着地する。
彼女の動きにワンテンポ遅れて、なびいた髪が、ふわっ‥‥と元に戻る。

「ふぅっ‥‥」
アリーナは、小さく息を吐くと、今度は壁に背中を向けて立った。そして‥‥

「ハッ！」
いきなり、前方宙返り！

見事な着地を決めた後、今度はもう少し高い跳躍で、もう一度。
その着地の後、直接今度は、後方への宙返り！
一回、二回。
いずれも危なげなく、着地を決める。

「はあっ‥‥はあっ‥‥」
さすがに、息が弾む。
宙返りの最中は、さすがのアリーナといえども、呼吸できない。
つまり彼女は、まったくの無呼吸で、前方宙返りを二度、続けて後方宙返りを二度、打ったのである。
息が弾むのも、当然であった。

「はぁっ‥‥」
シャツの裾を両手で持って、額にうっすら浮かんだ汗をぬぐう。
まくり上がった裾の下から覗く、引き締まったウエストを‥‥見ている者は、誰もいない。

「よし、いい感じ‥‥」
アリーナは、自分に言い聞かせるように、呟いた。
「‥‥最後に、もうひとつだけ」

言うと、さっきより心持ち広めに、足を広げる。
胸の前で、右拳を握る。

「すうっ‥‥」
息を吸いながら、その拳を右腰に引く。
そして、上体を右側に思い切りひねり‥‥！

「ヤアッ！！」
ドグオオッ！

その反動を付け、右拳を一気に撃ち出した！

もし、この場に誰か他の者がいたならば、彼の目には、一瞬、アリーナの右拳が「輝いた」ように見えたであろう。
もちろん、実際には、アリーナの拳が光を発するはずなどない。
が、目には見えないものであったが‥‥何か、尋常ならざる破壊力、エネルギーの輝きのようなものを、感じる事ができたかも知れないであろう。

明らかに、今の右正拳は、最初に撃った右正拳とは、違っていた。
最初の右正拳の破壊力を「拳銃」とするなら、今の右正拳は「ミサイル」‥‥そう例えられるほどの破壊力を秘めているのだ。

この「最後の右正拳」の正体は、今はまだ明かすことはできない。
が、ただ、これだけは言っておこう。
これこそが、この天才格闘少女、アリーナ・フォン・サントハイムの「必殺技」なのである！

＊

「ふううっ‥‥」

アリーナは、長い息を吐いた。
この「突き」は、普通の突きと違い、体の筋肉に非常な負担を強いる。
ゆえに、連発は出来ない。
また、一発撃った後に、体の動きが一瞬止まり、大きな隙が出来る。
看過出来ぬ欠点ではあった。

右腕の力を抜き、こめた「気」を逃がす。
「まだまだね‥‥もう少し、撃った後の復帰（リカバー）を早くしなきゃ‥‥」
そんなことを呟いていると‥‥

＊

トン、トン‥‥
再び、ドアをノックする音がした。

「‥‥？」
アリーナの体に、一瞬、緊張が走る。
（誰だろ‥‥こんな夜中に）

クリフトやブライなら、先ほど、充分過ぎるほどの話し合いをし、別れたはずだ。
かといって、その他に、この時刻に訪ねてくる者の心当たりは、彼女には無い。
だとすれば‥‥
少なくとも、予期せぬ来客。それも、好まざる来客の可能性がある。

そう、具体的には、彼女を誘拐する、あるいは命を狙う目的で、この部屋を訪れた者！

「お城の中とはいえ、完全には安心出来ないわね‥‥」
言いながら、戸口にゆっくりと進むアリーナ。

蝶番（ちょうつがい）の横‥‥扉を開けば、その陰の死角になる場所に、壁を背にして、アリーナは立った。

「はーい？」
なにげない声で、返事をする。

「あの‥‥夜分遅く申し訳ありません。よろしいでしょうか？」

扉の向こうから返ってきたのは、女性の声だった。
しかも、この声には聞き覚えがある‥‥？

「モニカ姫‥‥？」

一瞬戸惑うアリーナの声に、しかし、扉の向こうの声は、はっきりと答えた。
「はい。美味しい香草茶（ハーブティー）がありますの。一緒にいただこうと思って」

「ごめんなさい、今開けるわ」
先ほどの警戒心はどこへやら、アリーナが慌てて、ドアを開ける。

そこに、モニカは立っていた。

レモン色の、絹だろうか‥‥光沢のある生地で出来た、ネグリジェというにはやや裾が短く、かといってパジャマというには裾が長過ぎる、そんな寝着（ナイティ）を着ていた。
胸元には、ボタンと、可愛らしいピンク色の小さな飾りリボンが付いていた。
その下に、同じ色のズボンを履いていた。ということは、やはりこの服はやはり「パジャマ」と呼ぶべきなのであろう。

そんな出で立ちのモニカが、ポットとティーカップ、あと皿の乗ったお盆（トレイ）を両手で持ち、立っていたのである。

モニカは、開いた扉の前にアリーナの姿を認めると、ちょっとだけ首をかしげ、にこっ、と微笑んだ。
男性なら、一撃で心（ハート）を鷲掴みにされそうな、そんな微笑みだった。

それを見て、やっと、少し緊張していたアリーナの表情にも、微笑みが戻る。

「ごめんね、ちょっとお待たせしちゃって。さ、どうぞ」
アリーナに促されるまま、モニカは部屋に足を踏み入れた。

＊

「美味しーい！」
驚きと幸せに満ちた表情で、アリーナが言った。
もちろん、モニカの持ってきた香草茶（ハーブティー）を一口すすった、その直後である。

「でしょう？」
モニカも、カップを両手で支えながら、笑顔で答える。
「先日、東方の商人が立ち寄った時に、自慢の品だ、って勧められたものですのよ」

「それに‥‥このクッキー！ こんな美味しいの、食べたことない！」
心底嬉しそうに、クッキーをかじりながら、アリーナが言う。
「これは、この城の菓子職人（パティシエ）が作ったものですけど‥‥お口に合って何よりですわ」
「んむー！ 美味ひい美味ひい！」
「もう、落ちついて召し上がって下さいな」

今、二人は、同じベッドに隣同士で腰かけたまま、クッキーを食べつつ、香草茶（ハーブティー）を飲んでいる。
ポットと盆（トレイ）は、倒してしまわないよう、床に置いた。
二人の間には、クッキーの皿。
皿を挟んで、同じ方向に‥‥アリーナは、足を少し開いた、ちょっと行儀の悪い格好で、モニカはきちんと膝を揃えて上品に、それぞれ腰かけていた。

「あの、アリーナ姫様‥‥」
沈んだ声で、モニカが切り出した。

「ん？ なーに？」
クッキーを口にくわえたまま、無邪気に、アリーナが聞き返す。

「本当に‥‥ありがとうございました。武術大会に出場して下さって」
モニカはそう言うと、アリーナに深々と頭を下げた。

「へ？」
きょとんとした顔で、くわえたクッキーを一口かじると、アリーナはへらへらと笑いながら、左手をひらひらと振り、答えた。

「いや、いいっていいって。本当言うと、私も出たかったし」

「えっ？」
顔を上げ‥‥少し驚いた表情のモニカに、あくまで明るく、アリーナは答えた。
「エンドールの武術大会って、格闘やってる人間には、本っ当〜に憧れの大会なのよ」
＜本っ当〜＞の部分に特に力をこめて、アリーナは言う。
「だから、今までずっと、いつかは必ず出てやる、それぐらい強くなってやる‥‥そう思ってた」
「アリーナ姫様‥‥」
不安げな顔で、胸の前で手を合わせるモニカに、アリーナは、これ以上ない笑顔で言った。
「だから、ぜーんぜん気にする必要はないの！ 逆に、こんなに早くチャンスが巡ってきて、自分でも舞い上がってるぐらいなんだから」

そう言うと、アリーナは、皿からクッキーを２枚、つまみあげた。
それを、空中に、ひょい、と放り上げる。

「‥‥？」
怪訝そうな顔のモニカを尻目に、アリーナは、真剣な面持ちで、落ちてくるクッキーを目で追う。
そして、クッキーが彼女の胸の高さほどまで落ちてきた瞬間！

シュッ！

一瞬、アリーナの右手が動いた、ように見えた。

次の瞬間、
「ふぅ‥‥」
アリーナは、大きな溜め息をつくと、いたずらっぽい笑顔で、モニカの前に、軽く握られた右拳を差し出した。
そっと、拳を開く。

「！」

驚くモニカ。
そこには、先ほど放り上げられたクッキーが２枚、少しも欠けることなく、握られてい

たのだった。

「凄い‥‥」
モニカは、目を丸くして感嘆する。
別々に落ちてくるクッキーを２個、片手で一瞬の内に、しかも形を崩すことなくつかみ取る‥‥それは確かに、常人には至難の業であった。

「なんかね‥‥止まんないのよ」
クッキーを掌から皿に、からりん、と落としながら、アリーナがぼそっと呟く。
「えっ？」
「止まんないの‥‥体が熱いの。ずっと‥‥炎が燃えてるみたいに」
鋭い目をして‥‥しかし、口元には笑みを浮かべ、アリーナは続けた。
「さっきから、ずっと体を動かしてたけど‥‥全然、止まんないのよ‥‥
　戦いたくてしかたがないの。体が」

視線をモニカと合わせず‥‥ずっと斜め下を向いたまま、言う。

格闘家の顔だった。

何か、自分とは別の世界の人間を見ているような気が、モニカにはしていた。

自分と同じ王家の息女、しかも自分よりいくぶん年下の少女。
しかし、今、自分の目の前にいるのは、そうでありながら、そんな少女が持ち得るとは思えない「凄味」‥‥「オーラ」のようなものを、全身から発散させている、そんな人物なのだ。

（アリーナ姫様‥‥）

複雑な表情で、アリーナの顔をじっと見ているモニカ。
その視線に気がついて、アリーナは、しまった、という表情を浮かべた。

「あ、ごめん！ 私ちょっと自分の世界に入ってたね、今」
大げさに謝って、カップの香草茶（ハーブティー）を一気にすする。
「あちちっ‥‥！」
もういい加減ぬるくなったと思ったのだろう、予想と違う熱さに、思わず舌を出し、顔をしかめる。

「まぁ‥‥ふふっ‥‥」

今まで、自分の知らない「格闘家」の顔をしていたアリーナ‥‥しかし、それが普通の、というより、おっちょこちょいな「１７歳の女の子」の顔に戻ったのを見て、思わず微笑むモニカ。

「‥‥へへっ‥‥」
アリーナも、照れ隠しに、頭を掻きながら、少しだけ、笑った。

幸せそうな、少女たちの笑い声だった。

＊

「本当にごめんね、なんか自分のことばっかり」
すまなさそうな顔で、アリーナは言った。なおも続ける。
「大丈夫よ。さっき言ったこと、ちゃんと忘れてないから」

「さっき言ったこと‥‥？」
「そ。『私が助けてあげる』って、言ったでしょ？」

アリーナが、右手を、すっ、と差し出す。

「絶対優勝するから‥‥。約束ね」

「アリーナ姫様‥‥」
感極まって、モニカの瞳に、大粒の涙が浮かぶ。
「ええ、約束‥‥ですわ」
アリーナの手を、そっと握る。

石造りの城の一室で、しっかりと手を握り合う、二人の少女。

もしかしたら、モニカには、この時のアリーナには、天使の白い羽根が生えていたように、あるいは見えたかも知れない。
それは確かに、ただの握手だったが‥‥しかし同時に、それは、モニカにとっては、美しい天使が救いの手を差し伸べてくれる、厳粛な儀式であったのだから。

そして、アリーナにとってもまた、この握手は、「負けられない理由」を自らの中に作り出した‥‥大事な、大事なものだったのである。

＊

「『自分のことばかり』なんて‥‥とんでもありませんわ」
目尻に溜まった涙を指で拭きながら、モニカが言う。
「先ほども、私(わたくし)の身に起こったことなのに、まるでご自分の事のように、お父様に対して怒ってらっしゃったのを見て‥‥嬉しかったですわ」

アリーナは、苦笑しつつ答えた。
「『自分の事のように』か‥‥はは、クリフトと同じ事言うのね」
そして、遠い目をして、続けた。
「怒りたくもなるわよ。だって、あなたに‥‥あんなつらい思い、させたくないし」

「あんな、って‥‥？」

モニカの胸に、疑問が沸き上がる。
「あんなつらい思い」‥‥アリーナは、そう言った。
そして、この言葉は、実際に「つらい思い」をしたものにしか‥‥そう、実際に、望まぬ結婚を強いられた者にしか、言えないもののはずであった。

「うん、私ね‥‥」
アリーナが答えた。

「一度、お嫁に行った事があるのよ」

＊

「姫様が‥‥結婚していた事がある‥‥？」
クリフトが、信じられない、という顔をして、言った。

ブライとクリフトは、アリーナのいる貴賓寝室の隣の部屋にいた。
隣の部屋よりは質は落ちるものの、来客用にしつらえられた寝室である。

今さっき、クリフトが、さっきの件‥‥アリーナのエンドール王への怒りが、本当に他人事ではなかった、とブライが言った件に関して、そのブライ本人に問いただしたのだ。
それに対する答えを聞いたクリフトの驚きが、上の一言である。

「結婚、と言うても、別に何があったわけでもない」
寝間着に着替えたブライが、淡々とした口調で言う。
「何せ、当時、姫様はまだ７歳じゃからな。真に＜結婚＞できる歳ではないじゃろう」
「は、はぁ‥‥」
「真に＜結婚＞」という所に反応してしまったのか、顔を少し赤らめながら、クリフトが返事を返す。
「それに、その『結婚』自体、わずか数時間で御破算になってしまったのじゃからな」

「しかし、一体、どうしてそんなことが‥‥」
「どうして、か‥‥」
ブライは、なぜか遠い目をして、答えた。
「どうして、と問われれば、『それが政治の恐ろしさだ』としか言えぬな」
「政治‥‥ですか？」
「政略結婚じゃよ」

苦々しげに、ブライは言った。なお続ける。

「ヴュステ公‥‥名は聞いたことがあろう？」
「王家の遠縁‥‥かつて、サントハイムの東の砂漠一帯を支配していた公爵ですね」
「左様」

クリフトの知識に内心舌を巻きつつ、ブライは答えた。

「しかし、ヴュステ公爵家は、十年ほど前に取り潰されたと聞きましたが」
「その通りじゃ」
ブライの口調が、次第に熱を帯びる。
「最後の代の公爵が、小悪党でな‥‥いろいろ陰謀を巡らして、最終的に、王座をよこせ、と言って来よったのよ」

「そんなことが‥‥」
国民には知られていない‥‥クリフトにとっても、初めて聞く、サントハイムの「裏の

歴史」であった。

「もちろん、陛下がそんな要求を受け入れるはずはない。じゃが‥‥ここからが陛下の凄いところでな」
ブライが、にやりと笑う。
「『余は王座を降りぬ。が、次代の王座はやろう』と言うて、当時まだ７歳の姫様を、公爵の嫁として、渡してしまったのじゃ」

「そんな！ 陛下がそんな事を‥‥」
クリフトが、声を荒らげる。彼の知るサントハイム王は、自分の娘をそんな風に扱うような人物ではなかったはずなのだ。

「まあ、聞け」
ブライが、クリフトをたしなめる。
「これも全て陛下の御意じゃ。陛下には、この騒動の顛末が全て分かっておいでだったのじゃよ」
「分かって‥‥いらした？」
「左様。王家の血に備わりし特殊な力‥‥予知夢でな」

「予知夢‥‥そうか！」
クリフトの声。
「それでは、陛下は、姫様が安全に、無傷でお城に帰られることをあらかじめご存じで‥‥」
「そういうことじゃ」

＊

「とにかくね、私には、『夜中にどこか怖いところに連れて行かれた』って記憶しかないんだけどね‥‥」

貴賓寝室のアリーナとモニカである。

「もう、あそこに着いてすぐに、『お城に帰して！』って大泣きして、大暴れして」

アリーナの話を、身じろぎせずに、モニカは聞いていた。

「あのスケベそうな公爵（オヤジ）の顔を、こう、ばりばりっ！ って引っかいてね」
両手の爪を立て、空中を引っかくまねをする。
それを見て、ほんの少し、モニカの表情が緩んだ。

「私を捕まえに来る兵隊の間を逃げ回ってね〜。もう無我夢中で」

＊

「公爵の私兵どもをてんてこ舞いさせた後、馬を強奪して、ひとりで砂漠をさまよっていたところを、陛下の近衛騎士団に保護された、というわけじゃ」
話し続けるブライの口調が、なんとなく楽しげに感じられる。
「何せ、予知夢で、どこに姫様が現われるかご存じじゃったからな。そこに騎士団を配備して‥‥」

そこまで話して、ふと、クリフトが苦笑めいた笑みを浮かべているのに、ブライは気がついた。
「何か、可笑しいかの？」
「いえ‥‥ただ、姫様は昔から姫様なんだな、と思いまして」
「まったくじゃな」
ブライも苦笑する。
負けん気の強い、バイタリティ溢れる少女‥‥アリーナ姫のその本質は、十年前も今も、全く変わっていないのである。

「で、じゃ。結果的に、ヴュステ公は、せっかく王家の娘を嫁にやったにもかかわらず、その王女に多大な恐怖を与え、あまつさえ王家に返してよこした、ということになったわけじゃな」
「形の上では、確かにそうなりますね」
「そして最後には、それが『王室に対する不忠』にあたるということで、断罪され、公爵家を取り潰されることとなったのじゃ」

やや間があって、クリフトが困り顔で言う。
「冤罪、ではないのですか？ 悪いのは姫様のような‥‥」
「素直に考えると、そうなんじゃがな」
ブライが続ける。
「その辺を素直に考えぬのが『政治』の『政治』たる由縁よ。陛下にとっては、取り潰しの口実があれば良かったのじゃ」

クリフトのため息が聞こえた。

「私には、『政治』は無理ですね」
苦笑しつつ、そう言うクリフトに、片方の眉を上げつつ、ブライが答えた。
「そうじゃのう‥‥。少なくとも若いうちは、関わらぬ方が良いかも知れぬな。お主は」

その言葉が、単にクリフトが政治向きの性格ではない、と断じただけなのか、それとも、そのような「汚れた」世界にクリフトを近づけたくないという、いわば「親心」だったのか‥‥
それは、神と、そしてブライ当人のみが知る事である。

＊

「‥‥というわけなのよ」
眉根にしわを寄せ、アリーナが続ける。
「イヤな話でしょ〜」

「そんな事があったなんて‥‥」
予想だにしなかった話を聞き、半ば放心状態のモニカ。

「私には‥‥」
アリーナが、うつむいたまま言う。
「あの時、父様が何をしたか、何を考えていたか、それは分からない。だけど‥‥」

しばし、無言。

「だけど、あんな思いは‥‥あんなに怖くて不安な思いは、私はもう二度としたくないし、他の人にだって、させたくないのよ」
泣いているような、笑っているような顔を、アリーナはモニカに向けた。

「アリーナ姫様‥‥」
不安げなモニカに、もう一度、今度はとびっきりの笑顔で、アリーナは言う。

「だから、私、絶対優勝するわ。優勝して‥‥あなたには絶対、あんな思いをさせない。絶対‥‥。約束よ」

「はい！」
モニカも、笑顔で答えた。

＊

「そうだ‥‥」

　ふと、モニカがそう言ったかと思うと、自分の首の後ろに両手を回し、何かごそごそと、手を動かした。

「？」
きょとんとするアリーナに、モニカは、その手を、すっと差し出した。
「アリーナ姫様、もしお邪魔でなければ、これを」

その手に握られていたのは、ペンダントだった。
円形の、銀の精巧な細工の台座の真ん中に、縦長の楕円の、透き通る深い蒼色の宝玉。

「碧玉（サファイア）‥‥？」

「そう‥‥王家の守護石、そして‥‥亡き母の形見ですの。今は私が肌身離さず身につけている物ですわ」
目を閉じ、ペンダントを胸の前で両手に握り締めながら、モニカは言った。

「これをお持ち下さいませ。私を護ってくれている母と、そして私自身の想いが、今度はきっと、貴方を護りますわ」

言うと、ペンダントを乗せた両手を、アリーナに差し出す。

「え、でも‥‥こんな大事なもの‥‥」
アリーナが躊躇していると、再びモニカが言った。
「お持ち下さい。私も、貴方のために何かして差し上げたいのです。貴方の力になりたいのです。貴方と一緒に戦いたいのです‥‥だから」
モニカに似合わぬ、強い口調だった。

その瞳をじっと見て‥‥アリーナは、口元に笑みを浮かべると、モニカの手から、ペン

ダントをそっと取った。
「ありがと。お借りするわ」
そのまま、鎖(チェイン)を首の後ろに回し、留める。

「‥‥」
真剣な面持ちで、首に提げたペンダントを片手で持ち上げ、じっと見つめるアリーナ。
「あの‥‥もしかしてお邪魔でしたかしら‥‥」
おずおずと、モニカが声をかけると、一言、
「まいったなぁ‥‥」
そう答えた。

「えっ？」
「貴方と、そしてお母様まで一緒に戦ってくれるのね‥‥ますます、負ける気がしなくなったわ」
そう言って、頭をぽりぽりと掻いてみせる。

「アリーナ姫様‥‥」
今にも涙をこぼしそうなモニカに、自身たっぷりの笑顔で、アリーナは答えた。
「何を泣きそうな顔してるのよ。もう優勝したも同然なんだから、もっと笑って」
「‥‥はい‥‥」
涙を溜めたまま、モニカは微笑んだ。

このペンダント。
実は、これこそが、この武術大会を通してアリーナの心の支えとなるばかりではなく、ある試合の勝敗を直接決することとなる、重要なキーアイテムなのである。
が、今はまだ、その話をする時ではない‥‥。

＊

「それでは、そろそろ失礼させていただきますわ」
ベッドに腰かけていたモニカが、すくっと立ち上がる。

「あ、ごめんね、なんか長話しちゃって」
「いえ、こちらこそ、夜分遅くに申し訳ありません」

お盆(トレイ)で両手が塞がっているモニカのために、アリーナがドアを開ける。

「アリーナ姫様、明日‥‥応援しますわ」
戸口で、モニカが言う。
「うん、よろしく！」
アリーナも、元気に答えた。
「では、また明朝。ごきげんよう」
「おやすみ〜」

手を振るアリーナに微笑みを返しながら、モニカはドアを閉じた。

「ふう‥‥」
ベッドに、ごろんと横になるアリーナ。

胸元で、碧玉(サファイア)が、深く涼やかな輝きを放つ。

「‥‥」
ペンダントを、目の前に持って行く。

「モニカ姫と‥‥お母様が護ってくれる、か‥‥」
碧玉(サファイア)は、何も言わず、ただ、優しく輝いている。

アリーナは、そのまま布団にもぐると、最後に一言呟いて、ゆっくりと目を閉じた‥‥。

「負けられないなぁ‥‥絶対」

（つづく）

＜次回予告＞

いよいよ大会当日。

アリーナ、エンドール王、選手たち。それぞれの思惑が複雑に絡まり合い、エンドールは今、熱き戦場(バトルフィールド)と化す！

「不屈の王女殿下(ハイネス)」第３話　「大会初日、早朝」

運命のゴングは、今や遅しと、打ち鳴らされるのを待っている‥‥。